

開智学校校舎の成り立ち

開智学校の最初の授業は、1872 年にかつての仏教寺院の境内で行われた。1868 年の明治維新は、社会的、政治的な変化をもたらし、教育制度も変化した。約 250 年間、西洋文化からほぼ隔離されていた日本は、様々な西洋の概念や技術を取り入れるようになった。やがて、伝統的な寺院建築は、開智学校の新しい近代的なカリキュラムにそぐわないと感じられるようになった。そこで、女鳥羽川のほとりに洋風建築の校舎を建てようということになった。

地元の棟梁・立石清重（1829-1894）は、東京や横浜に何度も足を運び、最新の輸入洋風建築を研究した。1876 年に完成した旧開智学校校舎は、その見聞をもとに設計されたものである。当時、政府の教育予算はなかったが、新校舎建設は国民の強い支持を受け、建設費の 7 割近くを寄付でまかなうことができた。

擬洋風建築

旧開智学校校舎は、擬洋風と呼ばれる独特の建築様式で知られている。明治時代（1868-1912）初期は、西洋の建築技術に関する知識はまだ乏しかった。そのため、伝統的な木工技術を身につけた大工たちが、その技術を駆使して西洋建築の外観を再現したのである。旧開智学校校舎では、こうした技術の例を数多く見ることができる。八角塔の外壁の石組みやレンガは、実は木材を漆喰や塗装で石やレンガに似せて作られたものである。また、正面バルコニーには、校名の入った巻物を持った 2 匹の天使と、その下で正面玄関を守る龍が描かれ、西洋と日本のモチーフが融合した精巧な装飾が施されている。

擬洋風建築

開智学校は、初等教育を主な目的としながらも、中学校、女学校、盲学校など、さまざまな施設を併設していた。19 世紀末に始まった学制改革では、全国平均の就学率は 30%に過ぎなかった。しかし、開智学校の出席率は 60%を超えており、教育の質の高さと地域社会の教育に対する価値観が反映されていた。

その後 84 年間、旧開智学校は女鳥羽川の氾濫で被害を受け続けた。1960 年の台風による被害もあり、移転と修復が決定され、翌年には重要文化財に指定された。1963 年に廃校となり、1964 年に現在の場所で日本の近代教育史を紹介する博物館として再開された。2019 年、旧開智学校校舎は教育建築物としては初めて国宝に指定された。現在、松本では松本城と合わせて 2 つの国宝のうちの 1 つとなっている。